

第26回日本臨床環境医学会学術集会を終えて

会長 木村穰

東海大学医学部分子生命科学教室

第26回日本臨床環境医学会学術集会は、東海大学高輪校舎（東京都品川区）において、2017年6月24日（土）と6月25日（日）の2日間開催された。今回の大会テーマは「環境の健康への影響とより良い環境づくり」としました。シックハウス症候群を代表的な疾患としてこの学会はスタートしていますが、石川哲先生たちのご尽力により、医学・建築学さらには環境科学が共同して厚生労働省の研究班も構成されてきたことは学会員皆知るところでありましょう。現在は種々の環境と疾患の関係を追究する研究や良好な環境をいかにして創造するかを検討する研究が発展していることからこのテーマとしました。全体で100名以上の参加者、演題数が50近くとなり盛会になりましたことは学会員の皆様や当日の参加者のご協力の賜物と心から感謝申しあげたいと思います。

今回の学術集会では特別講演のほかシンポジウム3件を設け、ポスター9題、口演34題、企業展示があり、学術集会後も本学会主催で電磁波過敏症の方々も含めての多くの市民のみなさんが参加できる市民公開シンポジウムを開催できたことは大変意義深いことあったかと思えます。1日目の懇親会では樽酒の鏡割りや会長が部長教員を務める東海大学医学部健康科学部管弦楽団の学生アンサンブルなどで和んでいただきました。

総会・評議員会は前日の理事会を受けて1日目の昼時に開催され、鈴木達夫先生の会則に基づく理事長ご勇退の後を受けて新理事長として私をご指名頂くとともに、今後の方針とともに2018年度予算案や新理事等が承認されました（議事録は本学会HPを参照下さい）。

特別講演は東京大学名誉教授で現在東京理科大

学教授の岩倉洋一郎先生の「食品の腸内環境に及ぼす影響と疾病との関連」と題するご講演をいただきました。体内の「環境」としての腸内環境は免疫学では現在非常にホットな領域であり、感染症のみならず多くの疾患で腸内細菌が重要な役割を果たすことが明解に提示されました。

シンポジウムIの「健康にやさしい都市・住宅環境とは」では、ケミレスハウスやケミレスタウンの第一人者でシンポジウムの企画担当の森千里他、鈴木規道先生、中岡宏子先生、中山誠建先生のご講演があり、これからの都市・住宅環境のあり方について様々な角度からの提案がなされました。シンポジウムIIは「Chemical Sensitivity and Sick-Building Syndrome」の単行本発刊の記念シンポジウムとし、監修に携われた柳沢幸雄先生、建築系から吉野博先生、医学系から坂部貢先生に発刊の経緯も含めてご講演いただきました。もちろん最新データとはいきませんが、日本における当該疾患の実情を海外に発信したという意味で、オーガナイザーとしても改めて意義深いものと感じた次第です。

シンポジウムIII「病院における院内感染の防除」は吉野博先生にオーガナイザーをお願いしていましたが、病院での実態を日高孝子先生が、病院設計のあり方を森本正一、井田寛、柳宇先生の先生方がわかりやすくお話しいただき、現状と今後の対策に関する議論を深めることができました。

市民公開シンポジウムは主催を日本臨床環境医学会とし、共催には早稲田大学応用脳科学研究会、協賛には全国保険医団体連合会、室内環境学会、東海大学の3団体の支援をいただきました。

「シックハウス症候群・化学物質過敏症・電磁波過敏症の最新知見と今後の展望」と題して学術集会後の25日の午後に開催しました。本シンポジウムは北條祥子先生がコーディネーターとなってお尽力され、西間三馨先生（アレルギー専門医の立場から）、水木まさみ先生（診療現場の立場から）、角田和彦先生（小児科医の立場から）、青木真一先生（歯科医師の立場から、北條先生が代読発表）、今井奈妙先生（看護師の立場から）、柳沢幸雄先生（環境システム工学の立場から）、東賢一先生（健康リスク学の立場から）、中下裕子先生（法律家の立場から）の8名もの先生にご発表いただきました。時間の制約や患者さんにとっては十分な会場ではありませんでしたが、終了後に寄せられた感想からは「滅多に集まることができない中で勉強や情報交換の出来る良い機会だった」というご意見が多く、好評のうちに終えることができました。

なお、今回の学術集会の会長賞には鍵直樹先生の「住宅室内におけるガス及びハウスダスト中のDEHP濃度の関係」、奨励賞には曲寧先生の「ブスルファン処置マウスの精子形成障害における牛車腎気丸の治療効果」若手奨励賞には本田祥平先生の「河川区域内の土壤に沈着した放射性物質が建築周辺に及ぼす影響調査」が選ばれ、本号にその発表内容が紹介される予定です。

最後になりましたが、本学会の開催にあたりましては、ご参加いただいた方々をはじめ、場所を提供頂いた大学関係者、協賛・寄付を頂いた学会、団体、企業関係者など多くの方にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

(2017.12.28記)